

後輩たちへのエール！ その1

2020年5月1日

あなたの貴重な3分をどうか僕にください。

◇今回は、小森山大さん（千葉大学国際教養学部）のエールです！

僕は2017年に関高校を卒業し、今は千葉大学国際教養学部の4年生だ。

「皆さんと変わらない普通の高校生だった」なんていうつもりは毛頭ない。常に人と違っていたい。他人と同じことをしていたくない。そうメラメラと思い続けて生きている。それはずっと昔からで、来年社会人になろうとしている今でも変わっていない。僕は大学に入るとその欲求を満たすかのように海外を一人旅したり、ヒッチハイクをしたり、意識高い系のプログラムに参加したりした。とにかく自分は人と違うんだという事を証明したくてがむしゃらだった。

ここで書きたいのはそこで起こった波乱の、「ヒッチハイクで入れ墨ヤンキーのトランクに詰め込まれる！？」でも、「フィリピンのスラムでストリートチルドレンにスマホをスラれる！？」でも、「挑戦を終えて成長した話」でもない。こういった体験談や大きな挑戦からどんな成長が得られたかという情報は既に多く巷に出回っている。そういったものを読んでも、「自分もこんな風になりたい！」と動き出せる人はなかなかいない。たいていの人は一回面白そうだと思っても後先を考えてそこでストッパーがかかってしまうものだ。だから、この機会に伝えたいのは、僕がどのようにして「行動を起こし始める」のか。という動き出すところの話である。

そこで僕は泣いていた。歩き疲れ、お腹もすき、お金をぼったくられて、やっとのことでたどり着いたおんぼろホテルのシャワーに打たれながら泣いていた。

「くそっ、なんだよ。なんでこんなとこ来ちゃったんだよ。家に帰りたいよう。」

こんなセリフを口にする哀れな青年を、さっきまで水から逃れようと必死だった隅っこのゴキブリも同情したのか、心配そうに僕を見上げている。

このおよそ1か月前、関連書籍を読んでいた僕は、急に途上国の貧困層の現実を自分の目で確かめたくなった。この時が初めてだったわけではない。今まで幾度かあった感情で、「またこいつが来たな」という感覚であった。心臓の内側からグツグツと湧いてくる感情。止まらない動機。「やるか、やるしかない。」これはもう逃げられない運命なのだ。ここで決める。僕はその5分後、親のクレジットカード（お金は必ず返します……）で、フィリピンの首都マニラ行きの航空券を買った。

僕の行動でこういった始まりは多い。気が変わらないうちに申し込む。海外なら航空券をとり、プログラムなら申し込み、人に会うと決めたらメールする。本気で自分がやりたいと思ったことは時間を置いてはいけない。友達に相談する必要もない。家族には相談した方がいい場合はあるけど。

僕のことを知っている人がこのことを知ったら、「何だ、あいつ大口たたいてる割にビビってて大したこと無いな。」と思うかもしれない。それでいい。人に言う時はカッコ悪いとこなんて黙るときゃいいんだ。かっこいいとこだけ切り取っとけばいいんだ。嘘ついてるわけじゃないんだから。

そう、つまり人に見せてないつらい面が必ずあるという事だ。あいつはすごい、真似できない。なんて光栄なことを言ってもらえる時がある。すみません。ほんとはこんなもんです。でも、きっとあなたが尊敬する人も、ライバル視しているアイツも、そんなもんです。そんなもんだと思いましょう。僕はそう思ってます。じゃなきゃやってられません。話題のインスタグラマーだって撮影の時はいろいろ駆使した裏側があるでしょう？ すごいアイツだって見せてない裏側がきっとある。やり始められるか。始める時に、震える手を止めて決断できるか。その差だ。でも決断の時のそのほんのちょっとの差が、でかい。そしてその差は積み重なってさらに大きくなる。

誰だって最初は怖いもので、何かを達成するにあたって困難はたくさんある。そんなことはわかりきっている。その道の先駆者たちだってそうだったと思う。

しかしそれを乗り越えて挑戦することが出来れば、それは自信になっていく。「自信は成功への一番の近道だ。」という言葉がある。さあ、頭の中を自信でいっぱいにして。経験から根拠のある自信を、残りのスペースは根拠のない自信で埋めよう。それがあなたの挑戦をさらに加速させていく。挑戦が新しい挑戦を引き起こすエネルギーとなるのだ。僕はこれからも歯を食いしばってやっていく。共に頑張ろう。

写真はそのフィリピンで涙ちょちょ切れながら見た夕日です。優しい人が撮ってくれました。

